

## 甘露一滴

山に登って、岩陰の清冽な小川の水を飲む。おそらくただの水なのだが、これぞ天の恵み、山歩きの醍醐味、まさに「甘露一滴」なのだ。巷では、いろいろなブランドの「名水」が売られているが、おそらくそれは、山歩きの途中で出会った「甘露」とはまったく異なるものなのでしょう。

さて、このたび、人間発達研究所が、「故田中昌人・杉恵両氏の 発達研究・発達保障論関係業績・資料保存プロジェクト」へのご協力をお願いしたところ、予想をこえる賛同を得ることができました。整理作業を担当しているものとしては、実際の資料にふれて再認識することも多く、発達保障という巨大な森に実際に分け入ってさまざまな発見にワクワクします。この中で長年の疑問を氷解させるような資料に出会うと、まさに「甘露一滴」であると感じます。できることなら、ご協力をいただいた方たちにも、この「甘露」を実際に味わっていただければと思います。

このニューズレターは、このプロジェクトに賛同いただいた方たちに、発達保障の森をたどって出会った「甘露」を皆さんにお伝えしたいとねがって発行します。末筆ながら引き続きこのプロジェクトにご協力をお願いします。

## 『一次元の子どもたち』

(中村隆一)

### ■テレビ番組『一次元の子どもたち』

『一次元の子どもたち』という映像資料がある。タイトルから一体どのような内容なのかなかなかわかりにくいものなのだが、実は 1965 年に近江学園で撮影された科学ドキュメンタリー番組である。高度経済成長時代に日本が突入し、障害者問題が社会問題化してくる時期であった。したがって、障害児問題の啓蒙がテーマの社会派の番組のように思われる。実際に見ていただくとわかるのだが、確かに障害のある子どもたちへの偏見や権利侵害の実態への怒りは底流にあるのだが、その告発にとどまっていない。

むしろ、障害のある子どもたちから学びとってきた発達の真実から人間発達の真理に普遍化し、発達のそれぞれの時期の必要として障害のある子どもたちの願いを伝えようとするものであったという印象が強い。

タイトルに「1次元」とあるのは、田中昌人の階層－段階理論の中の1次元可逆操作にほかならない。つまり近江学園で展開されていた現場の中での発達研究、しかもその最新の成果、いわば野で究められようとしている発達研究の途中経過を記録し伝えようとしたものである。



オープニングタイトル



当時の近江学園の門

## ■伝説の映像・映像の伝説

### 口伝説のはじまり

人間発達研究所のアーカイブ作業の一つの柱は田中昌人の関与した映像資料の収集とデジタル化にある。その映像資料のなかでも、テレビ番組は一つ分野・領域をなしている。特に、1960年代、京都大学の園原太郎や黒丸正四郎などの監修によってNHK大阪が制作した『3歳児』『幼児の世界』など、あるいは大津市の障害の早期発見・早期対応を紹介した『ユキちゃん、ヒロちゃんがんばれ、がんばれ』などは、いずれも現物が今のところ存在しない。特に初期のテレビでは、生放送が基本で、取材は一旦映画フィルムで撮影・編集したものを放映するという形が一般的だった。そして、そのようなフィルムが放送局に残されていることは、ほとんどのぞむべくもない。メディアが磁気テープ（ビデオ）になっても事情はほとんど変わらない。これは、『夜明け前の子どもたち』など映画として制作された映像資料とは全く違う事情であるといつてよい。

それでも、『幼児の世界』などは、日本放送出版協会から単行本化されており、こうした番組の存在が知られるのであるが、この『一次元の子どもたち』は、一時期存在するかどうかも、ましてや行方もさだかでない状況であった。

その後、人間発達研究所の前身となった「発達相談講座」第3回(1984年2月開催)の企画を議論する過程で、近江学園の1960年代の実践において、集団に焦点をあてて「渦」や「粘弾性」などの概念によって集団の動態が記述されていたことなどが話題になった。そして、朝、居室から洗面所にむかう子どもたちの場面をとった映像もあったはずだ、ということまでわかった。そしておそらく大木会の事務所のあるあざみ・もみじ寮に保管されているのではないかとということで、ご相談すると、その存在が確認をすることができた。そこで、夜の特別講座で取り上げることになった。解説は、この「一次元の子どもたち」を担当しておられた平田棟治さんをお願いし、上映をすることができた。その後、私たちもこの映像の存在も忘れてしまっていたが、田中昌人氏が南郷時代の近江学園で撮影された映像について整理をされた文章を書かれており、この『一次元の子どもたち』の所在も不明であると記されていた\*1。そして田中昌人氏の没後に資料の整理が始まったのだが、早い時期にこの『一次元の子どもたち』のガリ版刷りのシナリオが見つかり（写真1）、行方の確認をすることになった。今現在もテレビ局から寄贈されたフィルムは見つかっていないが、幸いなことにVHSにテレシネされた映像がもみじ・あざみ寮の資料室に存在していることがわかり、それをお借りしてデジタル化をおこなった。



朝礼で挨拶する糸賀一雄氏



朝礼に参加する  
田中昌人・杉恵夫妻

## □伝説の正体

この『一次元の子どもたち』のように放映後数十年たっても記憶に残り続けるのは希有なことだろう。ともかく毎日次々と私たちの前を通り過ぎていくテレビ番組の宿命といえるだろう。ましてや、テレビ番組の録画装置もない時期の映像である。

にもかかわらず、例えば、講座の企画の議論の中で突然、なぜ「確か洗面所の場面の映像があったはず」と思い出されたのだろうか。ほんの 40 分ほどの番組が語り継がれるに値する“伝説”になったのはなぜなのだろうか。

実はこの番組の放映後、撮影されたフィルムが近江学園に寄贈された。そのフィルムは、各地の学習会に貸し出されて学習会に使用されていた。先に紹介したガリ版刷りのシナリオも制作前に作られたものではなく、制作後にこのフィルムを用いた近江学園内外の学習会などに使用されたものと思われる（関西では放映されていなかった）。

このような取り組みを通じて、『一次元の子どもたち』を見聞きした人たちの記憶に鮮烈に刻まれたのだろう。

## ■東京 12 チャンネルと制作スタッフ.....

次に、『一次元の子どもたち』の紹介をしておこう。

### □制作は東京 12 チャンネル(現在のテレビ東京)

この番組を制作した東京 12 チャンネルは、財団法人日本科学技術振興財団テレビ事業本部の番組制作を目的として設立された「株式会社東京十二チャンネルプロダクション」（以下「東京 12 チャンネルプロダクション」）が、同財団から放送事業を譲り受けて発足したものである。

テレビ局と科学振興財団のつながりはやや唐突だが、その背景は次のようなものであった。

もともとは日本科学技術振興財団が母体となって 1964 年 4 月に設立された科学技術学園工業高等学校（現・科学技術学園高等学校）の**授業放送**をメインとして行う教育専門局（科学テレビ）として開局し、開局当時は民放ながら広告を流さない放送局として運営されたのである。

### □制作スタッフ

撮影後、近江学園研究部で文字化されたシナリオでは、制作スタッフが次のように紹介されている。

|       |          |    |                 |
|-------|----------|----|-----------------|
| ナレーター | 根岸アナウンサー | 編集 | 長谷川宣人           |
| 企画    | 柳沢 寿男    | 担当 | 倉益 琢真           |
| 構成    | 桑野 茂     |    | 林 道             |
| 選曲    | 本橋 康男    | 制作 | 東京 12 チャンネル     |
| 効果    | 本多 昭吾    |    | 1965 年 3 月制作    |
| 撮影    | 野沢清四郎    |    | 1965 年 4 月 4 日に |
| 〃     | 坂田 浩紀    |    | 放映              |

## □柳澤寿男について(1916～1999年)

この『一次元の子どもたち』の企画を担当した柳澤寿男は後に『夜明け前の子どもたち』の監督も務めている。柳澤の略歴は以下の通りである(神戸映画資料館 HP の、「社会福祉への眼差し」柳澤寿男監督特集解説ページより)。

1916年群馬県生まれ。松竹京都下加茂撮影所の助監督から出発した。劇映画『安来ばやし』(40年)を監督するが、『小林一茶』(41年 亀井文夫監督)に感銘を受け、記録映画を志す。戦後の混乱から高度成長に至る時期、日本映画社、岩波映画など多くの短編映画各社を渡り歩いて記録映画やPR映画を多数手掛けた。『富士山頂観測所』(48年)や『海に生きる』(49年)などで高い評価を得るが、PR映画全盛の時代に作家が望むような仕事は困難となり企業の宣伝に加担する仕事に見切りを付けることにした。自主製作を決意し、68年の『夜明け前の子どもたち』から89年の『風とゆききし』まで、計5本の長編ドキュメンタリー映画に取り組んだ。障害者の生活とその苦悩を通して人間が自由に生きることとは何かを問う作品群は、山形国際ドキュメンタリー映画祭や各地の福祉映画祭などで高い評価を得るなど、今も観客に感動を与える命の長い映画となっている。晩年は看護婦をテーマとした新作『ナースキャップ』に取り組んでいたが、実現しないまま1999年6月16日83歳にて急逝。

## □柳沢寿男と近江学園との接点について

玉村公二彦「戦後における障害児の発達と発達保障の記録の歴史的な位置づけをめぐって——近江学園などにおける映像記録を中心に——」(人間発達研究所紀要第26号 2013-03)では、柳澤の文章で『夜明け前の子どもたち』の制作が発端とされているが、実際にはそれ以前の1950年代半ばから取材に近江学園を訪れていた。

その延長線上で『一次元の子どもたち』が撮影された。おそらく1964年の秋から1965年の3月頃まで取材に何度か訪れているものと考えられる。

## ■発達研究の道行きの転機に制作された『一次元の子どもたち』……………

前述のように教育主体のテレビ局であるから「未知への挑戦」という科学ドキュメンタリー番組が制作されるのは当然であるが、本番組のタイトル『一次元の子どもたち』をお茶の間で接した視聴者にとっては、そもそも「一次元」という数学用語と「子どもたち」がどのようにつながるのか、あるいは番組の中で使用される「一次元の世界」などはほとんど了解不能であったに違いない。

ただ制作に深く関わった近江学園研究部の田中昌人からすると大きな転機となる映像であった。

第一に、この番組の制作とほぼ並行して、可逆操作の高次化における階層-段階理論の骨格をなす基本概念である「可逆操作」が、そして話しことば獲得期以降の操作変数として「次元」というとらえかたが登場してきた直後にあたる\*2。

第二に、それまで、学園内あるいは学界内のなかで論じてきた発達研究の成果を、世間の人たちにむかって伝えようとし始めたものであるという点である。この時期には雑誌愛護誌上での連載もなされている。『一次元』というタイトルそのものが、それまであり得ないと思われていた「精神薄弱児」の未知の世界を開く扉を象徴していたといえる。

## ■『一次元の子どもたち』が伝えようとしたもの——発達の実事——

このフィルムで取り上げられている発達の時期は、1次元形成期から2次元可逆操作期までである。K式発達検査 2001 にある「ハメ板」や「トラック模倣」、「形の弁別 I」、そして 1959 年頃から近江学園で使用されていた「精神作業過程測定装置」、などを通して、1次元可逆操作、2次元可逆操作が提示をされ、それとの関係で1次元、2次元の変数を持つものの質的転換にはいたっていない1次元形成期、2次元形成期の特徴が浮かび上がるように紹介されている。

そうして、ここで意識されているのは、そのような可逆操作によって浮かび上がる発達の過程である。「発達」ということばは用いられないが「自分を見つける」「自分を育てる」「自分をふくらませる」などのことばで表現されていることからわかるように、内発的な発達、自己運動としての発達、つまりは構成主義的な発達観を基盤において提示をしている。いわば、自分づくりである。

これから2次元可逆操作獲得に向かうふみおくんについては、次のようなナレーションが添えられている。「知能年令 3 才 1 ヶ月 (ママ)。重度精薄児として長い間一次元の世界にいた彼は、今は同じ変化なら、二つでも三つでもいくらかでも、次々にさばくことができる。伸びて行くこの子どもたちの精神が次に求めるものは、同時に二つの行動を一つに統一してやる力である」というように、今の姿は発達のな変化の積み上げの上に成立していることを述べ、従来の「変化しない」「発達しない」と安易に信じられていた「精神薄弱児」の発達の事実を提示している。

## ■『一次元の子どもたち』が伝えようとしたもの 指導の着眼点

そして、その自分づくりの歩みを周囲がどう支えるか(発達保障)という着眼点もこのフィルムではそれらが鮮やかに提示をされている。

近江学園では、内発的な発達への助成的介入の方法の吟味がなされていた。

一般論として発達が環境や助成的介入の影響を受けることは当然であるが、指導の技術や方法を吟味する上では、助成的介入の意味を一旦相対化する必要がある。とりわけ「指導の技術や方法」の吟味を「発達保障」という観点から再構成しようとするとき、助成的介入の発達の根拠を提示することは不可欠であった。

当時の近江学園での吟味が求められていた「指導の技術や方法」は、開設以降、「注入指導」、児童中心主義を経て、現場で模索されていた「枠づけ指導」の根拠についてであった。「枠づけ指導」とは近江学園の現場で提起されたものである。例えば、山の頂から水を流すとす。水は当然、低い麓の方に流れていくのであるのが自然である。しかし、自然に生じる水路では水が土の中に吸収されたり、麓にたどり着くまでに水たまりでよど

んでしまうこともある。こうした自然発生的な水路に任せるのではなく、その水路に沿いながらも、擁壁を創るなどして水の勢いを出来るだけ維持しながら、つまり水のもっている自然の流れ（内発的な発達の勢い）を殺さないようにする。こうした擁壁など水路の整備を「枠づけ」と比喩的に表現したものである。

フィルムでは、例えば、次のような場面にその着眼点が見られる。

### □きよしくん

まだ1次元可逆操作に至っていないきよしくんは、目標からめあてが分離できていない。どこに行くのかという目標は見えているが、「なんのためにそこに行くのか」という目当て（目的）は把握にしにくい発達の時期である。そのため、目標が見えなくなると、その場でくるくる回ったり、興味をひくものがあると、そこに気持ちが奪われたりしがちである。

やかんを先生といっしょに給食室まで持って行く。往きは、途中のシーソーに気持ちが向いてしまう。ところがお湯でいっぱいになったやかんを手にする、いったんシーソーに行きかけたのだが、居室の方に歩みの向きを変え、やかんを持って帰ろうとする。やかんが目当てを意識化する支えになっている。

### □かつおくん

かつおくんは、発達的には1次元可逆操作だが、その1次元可逆操作が“対の世界”である2次元を形成しようとしている。だから、自分の心とともに他者の心の存在に気づき始めている。しかし、他者の心の動きが了解できているわけではない。そのため、相手のいやがる行動をわざとして、その反応を手がかりに心の動きを探ろうとするような行動が目立つ。結果的に、人がいやがるのが分かっているのに、そして何度も注意されるのに、相手のいやがる行動を繰り返す。こうした姿は、今でも、どう対処するか手を焼く難しい場面である。ここでも、「枠づけ指導」が展開される。かつおくんの「発達的に進もうとしている方向」を見定め、そこへまっすぐに向かうことが出来るような手立てが講じられる。

ここで、指導者は「友だちにつかみかかる手を積み木に向ける」。フィルムでは、大きな箱積み木を使ってかつおくんをふくむ子どもたちが積み上げていく場面になる。最終的には、子どもたちが台車にのってくぐれるようなトンネルになる。

かつおくんのお試し行動が、他者の心の動きに焦点を当てているのであれば、同じように心の働きで成立し同時にお互いが仲良くなれるような活動、つまり見立て遊びを提起し、トンネルづくりによってその見立てを共有されるとき、心の動きも共有されることになるのではないかと、取り組みが展開される。いわば、「つかみかかる手をつなげる手に」作りかえていく。

## ■おわりに

田中昌人氏と大学の同級生で、教職員組合運動とのつながりをつくるきっかけともなった鴨井慶雄氏によると、社会に向けて発達を語り始めた時期に彼の転機があったと感想を

述べておられた（2012 年秋の同氏へのインタビュー）。この映像は、ちょうどその時期を記録していることになり、田中昌人の思想形成や研究上の発展をたどる上で重要な意味を持っている。

残念ながら現存する『一次元の子どもたち』の映像は、何度も上映をされたためか画質が悪い。シナリオもやや生硬な印象を受ける。が、その分いいたいことが直截に述べられている密度の高い作品であると思う。また、“発達のこのような姿に目を向けるのか”と何度も驚くような場面が出てくる。その意味では、今日においても、教育や保育の着眼点を発見しながら深めていく学びに役立つ映像と思う。

また、貴重な糸賀一雄の朝礼でのあいさつの場面やわかかわかしい田中昌人氏・杉恵氏夫妻をはじめ当時の近江学園の職員の姿も見る事ができる。

アーカイブの作業によって後世に引き継ぐことのできた貴重な映像である。

#### アーカイブの取り組みについて

#### □『I次元の子どもたち』資料集つくりました

発達保障、可逆操作、次元など当時の発達と実践の研究のための基本概念初出論文などを集めた資料集です（¥100 人間発達研究所扱い、送料¥140）

#### 収録内容

1. 田中昌人：学習発表会のさいにたちかえらなければならないところ 学習発表会のしおり No.1 近江学園 1964-12-06 pp. 11-13
2. 田中昌人：連載 精神薄弱児の発達 9 重度精神薄弱児の発達 2 愛護 87 33-36 日本精神薄弱者愛護協会 1965-02
3. 田中昌人：近江学園研究部のあゆみ（近江学園年報 No.9 近江学園 1961 213-245）
4. つよし学園児童部&成人部運営方針 1995-04
5. 東京 12 チャンネル：「一次元の子どもたち」ナレーション 近江学園研究部 1968

#### □アーカイブ基金の現状

2013 年初頭から関係者のみなさんに呼びかけてきたアーカイブ基金に対し、11 月 15 日現在で、165 人から 434 万円のご協力を得ることができました。経済情勢も厳しい中、予想を上回る基金となりました。この基金は、アーカイブの作業を進めるための部屋の賃借料に充当します。予定では、今後 6 ～ 7 年は現在のような形で作業を継続させる基盤ができたこととなります。ありがとうございました。

#### □『光の中に子どもたちがいる』3 部作のデジタル化が完了

大津市が制作した大津市の障害児保育の記録映画『保育元年』シリーズと並行して撮影された『光の中の子どもたち』は、完成直後から早期療育の実現に向けた地域の運動と結

びつけて全国で上映運動がなされました。そのため、奈良教育大学の玉村公二彦さんのご協力を得てフィルムの破損も激しく緊急の対応として暫定的にデジタル化を行ないました。3口以上の募金にこたえてくださった方にお送りしたDVDはその差異のもので、その後、2013年の春に、ほぼ完全なフィルムが未使用フィルムを田中昌人氏の監修のもとに再編集したものとあわせて発見をされ、前者については人間発達研究所共同研究基金によって、後者については玉村さんの方でデジタル化が完了しました。第3部は、退色がありますが、モノクロの第1部第2部は綺麗な画質でよみがえりました。『次元の子どもたち』とともに人間発達研究所で視聴をしていただけます。

### 口文献資料のアーカイブ作業 10月19～20日

今回のアーカイブ作業には、5の方が参加していただきました。各地の行事が重なっている日程でしたが、段ボール5箱分の資料の確認をすることができました。あらたに、1972(昭和47)年の雑誌「子どものしあわせ」に、障害のある子どもたちの教育権保障を訴えた「「悲しみの春」をなくそう——「特殊教育」政策とたたかう「障害児教育」への全入運動——」が確認をされました。

今回は2014年4月下旬から5月上旬を予定しております。関心をお持ちの方は是非ご参加ください。

---

\*1 田中昌人：南郷時代の近江学園を撮影をした映画フィルムについて（南郷 No24 1996）

\*2 この間の経過について、田中自身は次のように振り返っている（田中昌人：全障研の結成と私の発達保障論（全国障害者問題研究会編 『全障研三十年史』 全国障害者問題研究会出版部 1997 p499）。

「これは、第一教育部が「渦つくり指導」、第二教育部が「リトミックの指導」、第三教育部が「児童会、クラブ活動の指導」を課題追求の場としてきたのを踏まえて、精神作業過程測定装置による制御過程と面接過程、さらに学習発表会への取り組みの過程や生産教育活動での活躍ぶりを見て、一人ひとりの発達の姿の特徴を考えていた時のことである。ある日、参加観察を終えて、一九六三年一月に竣工した新講堂からの帰宅途中に、子どもたちがいくつの変数をもつて、新しい単位をもった活動をつくりあげることができているかという点に注目して、制御変数を単位として取り出せばよいのではないかといいことに気がついた。帰宅後、家族舎の外に広がる田上平野を眺めて舞台上（1964年12月の近江学園内の学習発表会の舞台：引用者）の活躍を平野の上に再現しつつ制御変数の単位をきれいにまとめることができた思い出がある。制御の特徴を可逆操作とすることは、次節で述べる経緯をもとに、それ以後『近江学園年報第一号』（1965）を書き上げるまでの間に導入を決めたものである」。